

Eureka XI

六年制通信 No.3 令和5年4月21日(金)号

克己

「克己ノート」というシールを1年生の先生方が作っているのを見て、思い出しました。何年か前、もう六年以上前だと思いますが、探したらありました。式辞の草稿が残っていました。その年の入学式で私は「君たちはこれから多くのことを克服していかないとはいけません。勉強を続けていくことは楽しい面もありますが、辛いことの方が多と思います。したがって、その勉強が中心となる学校生活は、楽しいことよりもむしろ苦しいことの方が多いと思います。へこたれそうになる自分、くじけそうになる自分を克服していかないとはいけません。これを、「己に克つ」と書いて「克己」と言います。これから先、様々な場面で「克己」の精神を涵養していきましょう。己に克つというのは、具体的には昨日の自分に克つということです。つまり君が競うべきは、君が克服すべきは、昨日の自分なのです、その積み重ねを、成長というのです」と述べています。今はもう「克己」という言葉もあまり聞かなくなりましたが、私の世代では克己と書いて「かつみ」と読む同級生が何人かいました。男の名前ですね。ということは私の親の世代、昭和一桁ですが、その世代の人には「克己」は馴染みのある、しかも自分の子の名前にするくらいですから好ましい言葉として認識されていたわけです。

学生時代の勉強会で「徳」を意味する英語の *virtue* の語源から、私たちは歴史的に人間の強さをどう捉えてきたかという話になって、そのときに「克己」が出てきたのをよく覚えています。この語がラテン語の *virtus* から来ているのは勉強会でもよく知られていました。さらに *virtus* (発音はウィルトゥス) の *vir* の部分は「男」、「兵士」であって、したがってギリシア・ローマの時代は「徳」とは兵士らしくあることと考えられていた、少なくともそういう一面があったことは間違いないでしょう。つまり戦争の絶えない時代においては、徳は強さと直結していたわけです。この強さとは戦争において相手を倒す肉体的な強さを示していました。ですからホメロスの時代(戦闘の時代ね)だと智謀に富める英雄とされるオデュッセウスでも実は剛弓を引く弓の名手となっていて、戦闘能力が高いことになっているわけです。知恵だけではまだ英雄になれなかった時代ですね。しかし、戦争の時代が過ぎ兵士の強さが徳の高さや人間の強さの指標とならなくなると、知恵のある者が徳の高い者あるいは強い人間と考えられるようになります。肉体的な強さはさほど評価されなくなったのですね。

戦闘において相手に打ち勝つには非常な勇気が必要ですが、平和な時代には打ち勝つ相手が存在しません。それで勇気をもって打ち勝つ相手を自分に置くわけです。自分が自分に勝つ。そうすると勝つ自分と負ける自分がいることになるのですが、もち

ろん自分の中にある「好ましくない自分」に対し「好ましい自分」が勝つこと、それが勇気ある強い行動だと考えるのです。あるいは辛いことに耐える能力であったり、今で言うところの同調圧力に負けないでどんな場面でも己の正しいと信じることを発言できる能力であったり、そういう弱い自分に打ち勝つことが人間の強さだということです。ここに克己という考えが生まれるのですね。

以上は昔の勉強会の話ではありますが、私は今でも「己に克つ」ことは美徳であると思います。ただし、何らかの苦痛をただ耐えることを克己とは言いません。克己を考えると、自分の意思の範囲にあるものかどうかを明確に決めないといけません。自分の意志でできること、自分の意志ではどうにもならないこと、これらを混同してはいけません。自分の意志でできることは「したくない自分」に打ち勝って行く、そういう強さが克己です。そして、自分の意志ではできないことに対しては心を動かさない、影響を受けないという強さも克己です。若いうちは後者の方が難しそうですね。

今週のおすすめ

・畑 正憲 『ムツゴロウの青春記』他 (文春文庫)

「季節は憶えていない。だが、赤いセーターが目に焼きついているので、たぶん四月の終りか五月のはじめのことだったろう」、これが書き出しです。50年近く前に読んだのにまだ覚えています。畑さんの文春文庫のシリーズは今でも書架にあります。畑さんの本を手にとったのは偶然でした。友人に勧められて本屋で探していたのが北杜夫の『どくどくマンボウ青春記』、しかし見当たらず、ふと「青春記」を目にして手に取ったのが『ムツゴロウの青春記』だったというわけ。まあこれでもいいかと思って読んだら面白くて「結婚記」から「博物志」と次々に読みました。当時出ていた本は全部読んだはず。奇人変人超人ですよ、この人は。無茶苦茶しますからね。何事にも「とことん」とか「徹底的に」とか、それくらいの形容詞では足りないくらい、恐ろしいほどの熱量を感じる人です。自分には到底できないことをやってくれますから、見ている分には面白いですがご家族は大変でしょうね、と思ったら奥様も似たようなお人らしいです。動物王国のテレビは毎回欠かさず観たよなあ。

ジャガーと戯れ、ワニと泳ぎ、アナコンダを首に巻いたら締めつけられ、ライオンに指先をかみちぎられ、ゾウに踏まれ、タランチュラを頭の上に乗せ、ヒグマにあごをかまれ何すんねんとグーで殴り返し、「いやあ、命の危険を感じましたねえ」と笑っているのですから到底普通の神経の持ち主ではないですわな。私が最も驚いたのは何十頭ものハイエナのいる、結構広い檻の中に入っていき「今から虎の目つきでハイエナを見つめてみます」といってそれらしい目つきをしたらハイエナが逃げていったのです。「目を戻しますね」でハイエナたちが戻ってきます。そのあと仲良く遊んではりましたわ。東大の大学院でアメーバの研究をしていた人とは思えませんね。私はムツゴロウさんのファンでした。『ムツゴロウの放浪記』は学生時代、自分が将来どうなるのか不安だった時代、何度も何度も読んだなあ。亡くなられて本当に残念です。

BGMは aiko の あかときリロードでした…。